
アイシテルってツタエタクテ

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイシテルってツタエタクテ

【Nコード】

N6383P

【作者名】

楓

【あらすじ】

病気持ちの女の子とお金持ちの女の子のお話です。

生きている意味

私は幼い頃から心臓の病気を持っている。その為に、入院など繰り返し学校にも行けなくなつた。小学生のとき大の仲良しだった幼なじみの美和子ちゃんは私の事すごく理解してくれた。親よりも私の心が分かつてる。

本当だつたら今は大学1年生。だけど未だに学校へ行けてない。ベツドの上で1人寝ているだけの生活。

外でこどもたちが嬉しそうな声を出しているのを聞くと本当に煩い。「なんで私だけこんな目に合わなきゃいけないの…」って思っちゃう。

今日も美和子ちゃんはお見舞いに来てくれた。

いつも私の大好きなプリンを買ってきてくれるの。

毎日きてくれて、毎日美味しいおやつを持ってきてくれた。

美和子ちゃんの家はお金持ち。

あ 自己紹介遅れました。私の名前は優良ゆうりょうといます。

ゆ「美和子ちゃん、いつもありがとう…」

み「いいのよ。ゆうりのこと分かってあげられるのはアタシしかないんだから。」

美和子ちゃんはいつも笑って答えてた。

こんなに美人でいい人なのに彼氏がない。ありえないと思った。

ゆ「わぁゝ美味しそう!!!」

み「今日はアタシが作ったプリンよ。食べてみて?」

私は昔から美和子ちゃんが作ったお菓子がだいすきだった。どこの
お店にも売ってないような美味しい味で…もう幸せだった。

あなたが必要

プリンを口の中へ入れた瞬間…ホッペが落ちそうなくらい美味しかった。ゆ「やばい…いまなら死ねるよ……………」

み「そんなこと言わないの!!!」

冗談で言っただけだね…………。

私はあまり甘いものを食べ好きないようにって医師から注意されている。

だけど守れなくてつい食べちゃうんだよね…

だけど、不思議で太らないの。ただ寝てるだけの生活なのに…

ママ「あーあ…また食べてる……。あんまり食べちゃいけないって分かってるでしょ?」

ゆ「分かってるけど…美和子ちゃんが作ってきてくれたんだもん。」

み「すみません…ゆうりには甘いものダメって分かってるのに、食べさせてやりたくなるんです…………。」

美和子ちゃんは私が持つてるプリンを取り上げて箱に閉まった。

ゆ「あつ……。まだ食べてるのに……………」

み「もう持つてこないからね。ゆうりのためだから……………」

美和子ちゃんは私の頭に手をのせてポンポン叩く。

まだ一緒に居たいのに、美和子ちゃんは私の部屋から出て行ってしまった。

ゆ（わたし…生きてる意味ないよね……。なにかも禁止で…生まれて来なきゃよかったのに……………。）

それからリス力をするようになった。

最初は痛かった。だけど慣れるうちに痛みも感じなくなった。

幼なじみの美和子ちゃんにも言えないことをしていた。

それから服装は長袖を着るようになった。バレないように……

初めてのキス

次の日、美和子ちゃんは約束通り何も持って来なかった。

私は逆に食欲がなくなっていた。朝ごはんやお昼ごはん、夕ごはんもママが作ってくれたのに全然食べない。美和子ちゃんが作ってくれた美味しいお菓子のおかげで、ご飯だって食べれたのに私の大好きなものを取り上げられて食べる気がなくなったのだ。

み「…ごはん、食べないの……？」

お昼からだいぶ時間が経っていた。

ゆ「うん、食欲なくて……。」

み「食べないと、身体に良くないよ……？」

ゆ「……………」

私は美和子ちゃんの言葉を無視した。

悪いコトだったのは分かっているんだけど……。

《あなたが作ったプリンがもう一度食べたい。》

言いたくても言えない言葉。言ったらママに怒られる。

美和子ちゃんにも迷惑かかるから。

み「どうかした……？」

私がつつむいてると美和子ちゃんは私の顔を覗きこんできた。

ゆ「あ……ううん。なんでもないよ。」

み「そう……。ねえ、ご飯、ちゃんと食べよ？お母さん作ってくれてるんだから……」

美和子ちゃんはスプーンで食べ物を救い上げ、私の口元に近づけた。

ゆ「……。……。」。私は顔をプイツと右に向けて、美和子ちゃんを困らせた。

み「わかった……そこまで言うなら……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。」。……。

美和子ちゃんはそのスプーンを自分の口に入れて、そのあと私の口に無理矢理押し込んできた。

ゆ「……。……。……。！?」

「めんなさい

これが…美和子ちゃんと初めてのキス……。ビクリして私は啞然としていた。

ゆ「……………」。

み「ここまでして食べてほしいって思ってるんだからね……？ちゃんと食べよ……？」

私はなにがなんだか分からなくなって、思わずうん……と、うなずいてしまった。

み「うん、えらいっ！」そう言うと美和子ちゃんは笑顔で私の頭を撫でた。

私の顔は真っ赤になり……恥ずかしかった。

久しぶりにお昼ご飯は全部完食。でも胃が苦しい。吐きそう……

私は気持ち悪くなってトイレにかけこんで全部吐いてしまった。せつかく……食べれたのに……。

今の体重は35キロ……。ガリガリで気持ち悪かった。

鏡で自分を見るのが嫌だった。でも、食べたなら吐く……食べたなら吐く……の繰り返し……。

部屋に戻ったら美和子ちゃんが心配そうにこっちを見ていた。

ゆ「ごめん……もう、食べれない……………」。

そう言って私はベッドに入り、布団をかぶった。

み「無理……なくていいから……。また明日も来るね……………」？

そう言って私の頭をポンポン叩き、部屋を出て行った。

ゆ（ごめんね……お母さんお父さん……美和子ちゃん…………）。
（

生きたい。

私はもう耐えきれなかった。

生きていくことが……。

でも、怖くて死にきれない。

みんなと会えなくなることが一番嫌。

でももう限界……

私はナイフで腕 脚……腹……切れる所は全部切った。

血がダラダラ出ている。私は絶叫した……

ゆ「う……うわあああああ……！！！！！！！！！！」

その言葉に驚いてママとパパが走って来た。

「？！」「？」

「なにを騒いでいるんだ!!!」

ママとパパは私に凄く冷たいの。病気持ちだからかな……いつもほったらかし。

様子も見に来てくれなくて……寂しかった……。

ゆ「ママと……パパは……私なんか居なくなつた方がいいんでしょ……
……！？私が邪魔なんでしょっ！？お兄ちゃんと三人暮らしの
方が楽しいんでしょ……？！私なんか生まなきゃよかったのにな……
……………」

丸裸で血だらけの私を見て、驚くママとパパ。

ママ「なに言ってるのよ……落ち着きなさい……？ナイフ……下ろして……」

パパ「きゅ……救急車呼んでくる……！」

ゆ「救急車は必要ないよ……わたし……このまま死ぬ……んだもん……」

そう言つてナイフを自分の方に向けて、おもいきり心臓らへんにぶっさした。

倒れた私を見て、ママとパパは焦り出して救急車を呼んだ。
ママは美和子ちゃんのこと事情を話して呼び出した。

私の呼吸は心臓の病気のため危なかった。
すでに意識は無く、手術の成功を祈るだけだった。

ありがとう。

何10時間もかかり、一応手術は成功。

一命はとりとめた。

ママとパパと美和子ちゃんは私が目覚めるのをひたすら待ち続けている。

ゆ「ん……………」

手術から何時間後。私は意識を取り戻した。身体中が痛かった。

みんなに…会わせる顔がない……………」

私はそう思って布団に潜り込んだ。

真っ先に私の手を握ってくれたのは…

美和子ちゃんだった。

み「バカバカっ…！！…ゆうりはバカよ！！私を置いていくなんて……………！！！！！！！！」

ゆ「……………ごめんなさい……………」

それしか言えなかった。それだけしか。

ゆ（なんだ…生きてたのか……。あのまま死なせてくれたってよかったのに。。。）

そうは思ったが口には出さない。

私はしばらく入院となった。きっとママたちは喜んでるんだろうな……
私がかから消えて……
そう思うと胸が苦しくなった。

ゆ「ママとパパは帰っていいよ……お兄ちゃんがいるもんね……」

ママたちは何も言わずに病室をあとにした。

み「ゆうりのママたち……おかしいよ……。娘がこんななのに……帰るなんて……」

ゆ「私が生まれた時からママたちに好かれてなかったもん、わたし。いつもお兄ちゃんばかりで……」

今まであった悲しい出来事が頭を横切る。

小さい頃にやったクリスマスパーティー。
私にはチキンもケーキもプレゼントもなくて、凄く泣いた覚えがある。

お兄ちゃんには好きなものを与えていた。
病気持ちの私は、多分もう死ぬだろうと思われていたんだろうな……
……。だから何もくれなかったのかな。

1人考え事をしていたら涙が出てきた。

み「かわいそうに……私が……一番愛してあげる……ゆうりのこと……一番愛してあげるから……」。もうこんなバカなこととはしな

いで……ね………?」

その……美和子ちゃん言葉に涙が溢れた。

ゆ「ありがとう……ありがとう……ありがとう………!……!……!」

言葉に現せない気持ち

それから毎日毎日お見舞いに来てくれた美和子ちゃん。私のこと愛してくれるって言ってたけど、本当……??

本当はこんな女の子…病気持ちな女の子…好きになるなんて嫌じゃないの……?

私はそんなことを考えていたらどんどん笑顔がなくなっていき、無表情になっていった。本当は愛してくれてないんじゃないかって思ってしまう。

み「ねえ…ゆური…?私、ゆურიのこと…愛してる、からね……??」

そう言うと、美和子ちゃんは私にキスをした。今日のキスは甘く…気持ちいいキスだった。

ゆ「……………」

私はしばらく喋っていなかったからしゃべり方を忘れてしゃべれなくなつた。病状が悪化したのかな…

ゆ「ありがとう。」

私は紙にそう書いた。

美和子ちゃんはニッコリ笑って私の頭を撫で撫でしてくれた。

ゆ「私も、美和子ちゃんのこと、愛してる。」

そう…伝えたかったことはこれだった。

本当は言葉にしたい。だけど、出来ない。

無理矢理声にしてみたけど。

ゆ「あ…い……………」

無理……………。

なんで喋れないの……………喋りたい…美和子ちゃんと会話したい……………！！！！

でもその、喋れないっていうのが病状が“悪化”していたせいでもあったし、“死ぬ”というのを教えるためにでもあった……………

自分ではもうすぐ“死ぬ”というのはわかっていた。
だけど美和子ちゃんには話していない。絶対悲しむから。

どうしたらいいのか悩んだ。

医師にも相談してみた。

でも先生や看護婦さんには話した方が良いんじゃないかとの答えだった。

無理…無理だよ……………今までいっぱいお世話してくれたのに……………！！

もう……………

そのまま死んだ方がいかな……………。

宣告された寿命は
あと1ヶ月。

これから辛い出来事が起こる。

死ぬって痛いのか？

美和子ちゃんが居るときにも吐き気は止まらなくて、細い身体がドンドン細くなっていた。

流石の美和子ちゃんもおかしいと思ったのか私に訪ねてきた。

み「ゆური…もしかして病状悪化してる……………」？」

一瞬ドキッとしたけど、すぐに首を横に振った。でも長く一緒にいるから、美和子ちゃんは気付いていた。私がもうすぐ死ぬということを……………」。

美和子ちゃんが病室を出て、担当医の元へ行つて話を聞いたらしい。担当医は私の寿命のこと…すべて話しやがった。傷つけたくなかったのに……………」。

でも、違った。

美和子ちゃんを傷つけたのは私。

戻ってきた美和子ちゃんは泣いていた。

み「なん…で…教えてくれなかったのよ……………」あと1ヶ月しかないじゃん……………」」

私は紙にこう書いた。

ゆ『だって、傷つけると言えなかったの』
み「あんたが言わなかったらあたしはもっと傷ついてた……！！！！」

ゆ『ごめんね……もう、私のお世話はいいよ……。私のこと……わすれて……』

言いたくなかった言葉。書きたくなかった言葉。

でも、こうでもしないと、美和子ちゃんは私のこと嫌いになつてくれない。

美和子ちゃんは泣きながら私の頬を叩いた。

み『私……本気でゆうりのこと大好きだからッ……！今まで通り毎日来るから……！！』

美和子ちゃんは泣きながら病室を出ていった。

ゆ（……でも、私……死んじゃうんだよ……？）

伝えたい言葉。

私…死ぬんだよ……？

私…1ヶ月後にはいないんだよ……？

なのになんで愛してくれるの？

あのね……もう生きてるのが辛いよ……………

その1ヶ月後…

本当に私は死んだ。

まだ意識があつて死にそうなとき。

家族はきてくれなくて美和子ちゃんだけがいてくれた。

私はそれでいいんだ。

それじゃなきや嫌なんだ。

もう…苦しい……早く死にたい……………

最後の力を振り絞り、美和子ちゃんに伝えたかったことを口にした。

ゆ『あ…いして………………』

ゆ（今までありがとう。大好き…愛してる…ずっと見守ってる…からね……………）

目を瞑って、私は息を引き取った。

伝えたい言葉。(後書き)

ここで終わりです。ぐだぐだな文章で申し訳ありません。
もっと頑張って小説を書こうかと思っています。

本当に読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6383p/>

アイシテルってツタエタクテ

2010年12月31日04時25分発行